

書評

クリフォード・ギアーツ、2012年、森泉弘次訳『文化の読み方／書き方』 岩波書店（岩波人文書セレクション）

Clifford Geertz, 1988, Works And Lives: The Anthropologist as Author, Stanford University Press.

小林 義寛*

1980年代の初め、まだ学生時代だった頃、ただ「行け」といわれた。今のように、「フィールドワークの技法」に関する入門書や方法論に関する案内を記したような本がほとんどない頃、初学者であった評者は、ゼミの担当教員から「行くしかない」というような、指導ともつかない言葉に半ば納得して、とある漁師町の仲買商が軒を連ねる地域に赴いた。

なんの準備もなく、なにも知らない評者は、どうしてよいかもわからず、町角に立ち、とりあえず地図づくりでも始めるか、と考えた。そして、仲買商の並ぶ「市場」の端から、邪魔にならない地点をみつけてはそこに立ち、店の並びをスケッチしつつ屋号を書き入れ、地図づくりを始めた。ある一角が終われば次の邪魔にならない地点を探して移動してスケッチ、と仲買商の営業している朝のうちの数時間を過ごした。

そうして数日した時、町角に立ちスケッチしていると、髭の生えた恰幅のいい、ちょっと厳つい男が睨んでいる事に気がついた。まずいかなと思いつつもスケッチをしていると、男が近づいてくる。当時20歳そこそこの評者にとっては「おっさん」と感じられたが、30歳くらいの眼光鋭い男だ。彼が「あんちゃん、なにをやってる」。

「はまった」と思った。ゼミの先生からは市場で海に放り投げられた話などの失敗を聞いたことのある評者は覚悟を決めた。海はすぐそこだ。投げ込まれる可能性で冷や冷やしつつ、「この地域の勉強をしてて」。たぶん「だから」みたいなことをいわれたのだが、覚えていない。あたふた応答をしていた記憶があるが、「地図もなにももってないから自分で地図づくりから始めようと思って」といった記憶はある。ぼくのスケッチ地図をみた途端、彼の顔が満面の笑みになって「なんだよ、偉いじゃん。いってくれりゃ、俺が地図、やるよ」。

仲買商の営業が終わるまでの間はスケッチ地図作りを続けて戻ってみると、例の彼が組合で作ったらしい「市場」の仲買商の並びを記した地図といくつかの資料を用意してくれていた。そして、地域史家や地域に関して詳しい人などを紹介してくれた。

本書を読みながら、自分の初めてのフィールドワークもどきの経験を思い出した。以来30年ほどを経て、人類学的な領域とは若干離れたこともあるが、民族誌やフィールドノートの断片さえ、著し得ていない。そんな評者にとって、あるいは多くの人類学（民族学）や民俗学を学ぶ者にとっても、民族誌を書くということは見果てぬ夢なのかもしれない。

本書は、フィールドワークや民族誌を書くことに関して「濃密な（厚い）記述」で有名なクリフォード・ギアーツによる、名著といわれる民族誌の批評的読解である。組上にあげられるのは、

*こばやし よしひろ 日本大学法学部新聞学科 教授

レヴィ＝ストロース、エヴァンス＝プリチャード、マリノフスキー、ベネディクトらであり、それらを通してフィールドワークあるいは民族誌の有り様を考察する。

20世紀末から現在にかけて、フィールドワークなりエスノグラフィックなアプローチなり参与観察なりの言葉が「現場主義」とか「臨床の知」とかの言葉と合わせて、安易に使われ、氾濫しているように思われる。評者には、そのような状況が至極安直に感じられる。それらが、もし仮にフィールドの知あるいは人類学的知を揺さぶるような、「氾濫」の同音異義語としての「反乱」をも意味するような用法ならいざ知らず、「ただ『そこ』へ行く」ということだけを指すなら——正直に感じられるのは多くが「行く」を意味するだけだろうし、それなのにあたかも「崇高」な行為をおこなっているかのような感覚を持たせていることに、評者は苛立つ。そもそもフィールドワーク自体が「崇高」な行為でも調査でもないだろうが、「ちょっとみてる」に過ぎないことをフィールドワークなどと語られると、単なる旅人と生活者との差異自体さえ理解できないのだろうか、と愚かにさえ感じられてしまう。そのような安易さを表明する前に、数多ある名著といわれる民族誌や参与観察調査を読めとか、「濃密な（厚い）記述」を学べとはいわないが、せめて本書を読み、フィールドワークなり民族誌なりの持っている意味を考えてもらいたいと思うのは無理な希望なのだろうか。

現実的には、フィールドワークや民族誌をめぐる状況は、1960年代末から70年代以来、多くの混迷の中にある。サイドが『オリエンタリズム』で示し、クリフォードらが端的に『文化を書く』で示したように、諸種の困難を抱えている。本書も、それらを前提にしながら議論が進められているが、異文化や他者と関わる、他者を記述することに関する問題系、人類学的・民族学的文脈でいえば「民族誌の権威」を考慮することなくアプローチすることは、自らの権力性や権威性を問うことのない、野蛮な行為である。それにもかかわらず、なぜ安易にフィールドワークとかエスノグラフィックとか語ってしまうのだろうか。

たとえば、周知のように初期カルチュラル・スタディーズのメディア研究における「エスノグラフィック・アプローチ」は全くもってエスノグラフィックではない。それでも、「エスノグラフィック」——確かにそれまでのオーディエンス研究に対するといった価値はあるが——といわれる。エスノグラフィー自体の知が激動中にある時に、だ。

けれども、本書を読む必要性は、単純にそのような言葉の使用だけにあるわけではない。

再び例をあげれば、レヴィ＝ストロースが民族学者の責任について語った時に言及した事例があげられよう。

彼がコレージュ・ド・フランスでアフリカのある民族の宗教について講義をおこなっていた時、ある青年が手を上げ、自分はその民族の出身であるが自分の民族にはそういった宗教はないと語った、という。レヴィ＝ストロースはそこで「未開」という言葉はもはや使えない、と悟った。⁽¹⁾

これはある意味でいえば、調査者と被調査者との非対称性自体が揺らいだことを意味する。

さて、ここで、わたしたちがおかれている現状を考えてみよう。ICTの飛躍的な展開と広範な普及の結果はわたしたちになにをもたらしたのだろうか。

スマホやケータイ、タブレットを用いれば、誰もがいつでもどこでも写真、映像、文字などの情報を送信できるし、既存のメディア生産者のものでなくとも、どのような情報をも受信可能になった。既存のメディア生産者がニュースを語っている傍らで、誰でもない誰かがどこかでそのニュー

スを別な視点で語る、あるいはその当事者や関係者が既存のニュースと異なった主張をおこなう——場合によっては既存のメディア生産者の矛盾や問題点を指摘したりもする。このような状況とコレージュ・ド・フランスでのレヴィ＝ストロースの状況とは、どこに違いがあるのだろうか。

フィールドワークや民族誌をめぐる諸問題は、このような非対称性の揺らぎとも関わっている。とするならば、広くメディア研究が現在遭遇している状況をめぐっても、本書は大きな示唆を与えてくれるだろう。それは単純にフィールドワークを取り巻く問題というわけではない。

付記

本書は、すでに1996年に岩波書店から翻訳出版されているが、「岩波人文書セレクション」として、学生や大学院生などにも比較的入手しやすい価格で2012年に再刊されたので、ここで書評することにした。そのため、すでに初訳時に多くの書評も記されていることから、本書の内容自体を直接論じるのではなく、あえて本書を若干別な視点に関わらせながら考えることにした。本書の内容自体に関しては初訳時の書評を参照されたい。

注

- (1) たとえば、レヴィ＝ストロースの日本講演の記録である、次の書を参照。レヴィ＝ストロース, C. (1979) 大橋保夫編、三好郁朗訳『構造・神話・労働—クロード・レヴィ＝ストロース日本講演集』みすず書房。同様の内容は、その他いくつかでも語っている。